

# 第4号

定価一年間300円  
組合員の購読料は  
組合費に含む



発行

## 檜山教職員組合

〒043-0056 江差町字陣屋町 86-1  
Tel 0139(52)0858 FAX (52)1490  
発行責任者 石橋英敏  
E-mail: hiyamakyoso@proof.ocn.ne.jp



# 2016檜山合同教育研究今金集会

## 制野俊弘氏の講演

「命と向き合う」  
問い続ける教育へ

# 心に沁みだ

10月8日、今金小学校で開催された檜山合同教育研究教科等集會に四十数名が集いました。被災地の子どもの姿を伝えた制野氏の講演は教育の根本を問うものとなり、感動を呼びました。

今金小学校の遠藤美由樹さんと田中淳子さんが進行しました。すすめる会を代表して挨拶した石橋英敏会長は、教育再生実行会議の提言を引きながら政策動向と学校現場の関係を説きました。また、細井敦現地実行委員会会長が歓迎の挨拶を行い、集會の成功を呼びかけました。

基調報告に立った内糸俊男事務局長は、職場体験学習のとりくみを振り返りながら、子どもたちの内面を潜らせる実践の在り方を追求することの課題を投げかけました。

7つの分科会が開設され、持ち寄られたレポートや資料をもとに、自由で率直な討論が交わされました。

午後、東日本大震災の被災地で中学校の教

員をやっていた制野俊弘氏（現在和光大学准教授）が、「いのち」と向き合う―問いながらつながる子どもたち―と題して講演しました。

氏は、「命の危機」の共有体験が、閉ざされた子どもたちの心を開くことになったとし、自らの体験と思いを綴った生徒の作品群を紹介しました。悲痛を押し殺しながら「健気に」振る舞う子ども、その奥深くに畳まれた「心の声」を聴き取ろうと、必死に子どもに寄り添います。「残された弟を守るために強くならなければならぬ」と一途な生徒、でも、自身を縛るその姿はこれ上なく切なく痛ましいものでした。「誰かに手を差し伸べてもいいんだよ」と言えるまでには、

氏が勤務する学校の生徒たちはほぼ1年間、NHKの密着取材を受け、昨年3月にドキュメンタリー番組として放映されました。その映像が映し出され、実際の子どもの息遣いや表情がリアルに伝えられました。

今日の「生きづらさ」と重ね、氏は「命」への問いは社会や世界と向き合うことになることと述べ、答のない問いを一緒に問い続ける営みは教育の本来的な機能の一つであると強調しました。

講演要旨は裏面で紹介



## 道教組初代委員長 檜山教組初代委員長

# 故小林勝行先生を偲ぶ

今夏八月二十二日、全北海道教職員組合と檜山教職員組合の初代委員長を務めた小林勝行先生が亡くなりました。享年七十七歳でした。

一九八〇年代から九〇年代、大きな政治的な困惑のなかで教職員組合運動が二分されていったとき、「それでも教職員組合運動の機軸は要求に基づく共同、子どもと教育を守るために誠実に障害困難を乗り越えていかなければならない」と訴え続けました。

道教組設立時の委員長を兼ね、文字通り北海道の教

職員組合運動を牽引してきました。道教組書記長でその後委員長を務められた若山俊六氏（二〇一〇年七月逝去）とは江差高校の同期で、盟友でもありました。

また、生活綴り方や地域対面学習で実践研究を積み重ね、多くの事績を残されました。実践記録「海に生きる小砂子の人々」は教育雑誌にも掲載され（一九九六年）、研究者の注目を浴びました。

地域に根ざす教育の創造性を考察したいとして小林先生への聴き取りを重ねていた滋賀県立大学の福井雅英氏は、「自らの生活と人生を子どもと教育に懸けるような教師生涯を燃焼させた人物像が浮かび上がる」と評し、逝かれた小林先生を偲びます。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 制野俊弘さんの本

### 『命と向き合う教室』

(ポプラ社発行 本体価格1300円)

取り扱っています。

ご希望の方は檜山教組までご連絡ください。

T 0139-52-0858 F 0139-52-1490



### 岡山合研 講演要旨



# いのちを同じく生きる

## 問いながらつながらる子どもたち

和光大学准教授 元中学校教員

制野俊弘氏

が食事代わりだった。養護の先生が聴き取ってくれたことで実態が見えてきた。まず、給食をきちんと食べさせて、誰が担当するかを決めて対応。その子を見守った。母親にはそのメッセージを送るしかなかった。

### 母の死を背負う子は

震災の日、卒業生を祝う会の準備中に津波警報が発令、一時間後に津波が押し寄せてきた。一度家に帰って亡くなった人もいる。四千八百人の町で五百人、11%の方々が亡くなった。でも、震災や津波以外のことも、子どもたちは命の危機に向かい合っていた。いじめや家庭問題で自殺を考えている子どもがいた。そのことを語り合うことで、自らの危機を乗り越えてきた子どもたちがいた。

命という視点で世の中を見たら、否が応でも社会や世界を問うことになる。この間の大きな災害を通して私たちが学んだことは何なのか、考えていきたい。

### お菓子が食事のE子は

震災で祖父母を亡くし、母親と二人暮らし。母親の生活が乱れ、食事の用意もままならない。不安な生活の中で不登校状態に。大量に買い込まれたお菓子

くないという子も当然いるし、判断は難しい。E子は、ツイッターで同じような人がいて、自分のことのように語ってくれるのが少し楽と話す。

### 命を守ってきたか」の自問

震災で母親を亡くし、父と二人家庭。祖父母や身近な親戚も他界し、唯一身内の父親は、懸命に働きながら家事をし、C子も頑張るが生活は厳しい。空腹を満たすにお菓子だけで過ごすことも。自分を探しに行つて津波に呑まれた母親。「自分のせいで亡くなった」と保健室で泣きながら語った。父は何日も母を捜したことも。のちにC子は弁論大会で発表した。

### 別れた父親を憎むE子は

仕事で忙しかった母親は津波に遭って亡くなった。「離婚していなければ母は仕事をする必要もなかった」と家を出て行った父を憎んだ。自分のいない所で担任が他の人に説明してくれたら、複雑な気持ちで説明しなくて済むのに、と言う。事情が分かってくれたらという気持ちがある。でも中には話をしてほし

### 私を変えた作文

運動会の最後で一斉に風船を放つ場面がある。震災で母親を亡くしたM子は「飛ばしたくない。この風船を飛ばしてしまつたら終わってしまう。みんなが飛ばした後に遅れて飛ばした。…」と綴った。伝えたいこと、叫びたいことはたくさんあった

れていたM子の心の叫びが聞こえ、涙が止まらなかつた。M子の深く痛ましい心に気づけなかつた自分を悔やんだ。

### 綴る「じつはE子は」

だからこそ綴らせることを止めてはいけない。単なる方法論ではない。教育の本質そのものと思う。進路説明会にたった一人で坐っている子どもに寄り添うとはどういうことか、「少しだけ泣いてしまった子どもをどう励ましていけばいいのか。」「自

### 問い続ける営みを

一度書いた作文を捨て、書き直したN子は、「同じ苦しさを知れないのがつらい。

### 問い続ける営みを

前略) 風船を大空に飛ばしたとき、涙が溢れてきました。風船を飛ばすことで願いが叶えばいい辛さや悔しさが無くなればいそう考えていました。けれど、なかなか風船を放し空へ飛ばすことができませんでした。理由はわからなかつたけれど、今考えるとわかるような気がします。私は大好きな母を忘れそうになっていきます。忘れたくないと思うのに少しずつ消えてしまいます。震災が起きる朝に交わした言葉も、声も顔も動作も。思い出せないことが多くなっています。それがとても怖いのです。母が私の中から消えそうに怖いのです。そして忘れていってしまう自分が嫌でしようがありません。風船をなかなか飛ばせなかつたのも忘れてしまつたかと思つています。この間、進路説明会がありました。私は進路説明会があるというお知らせを父や祖母に渡せませんでした。父は仕事だと知っていましたし、祖母は学校に来るのがたいへんでしょう。一番後ろの席に座り、私だけでも大丈夫と思つていました。けれど、みんな親がきて隣に座る。それを見た瞬間、少しだけ泣いてしまいました。それだけで泣いてしまう自分が情けなくて、母がいないことを改めて実感させられたような気がしてとても悲しかったです。母に会いたい気持ちが溢れてきます。自分の嫌なところやダメなところがどんどん見えてきます。人に頼りたいけれど、そうすると相手が困つてしまつたら相談できない。そう自分に言い聞かせていますが、本当はただ自分が相談したくないと思つてい。母を想う気持ちは私だけのものであり、それをほかの人に言いたくないのです。こんな矛盾に嫌気がさします。中略)

私にとつて母は尊敬する人であり、大好きな人です。そんな母がもういないからといって、前に進むためには忘れることはできません。母のことを時間が経つにつれ、忘れてしまつたのだら時間なんて経つてほしくないです。そんなことを言つたら母に怒られるでしょうけれど、これが私の本音です。けれど以前母に、生きてる人を大切にしたいと言われました。母が大好きで、死んでしまつたことをまだ理解できなくて、不安で怖くて。そんな思いでいはいでしたが、私には母だけではないのです。心配してくれる人や笑い合ってくれる友人、慕ってくれる先輩。全ての人が大切で、私を支えてくれています。母は死んでしまつたけれど、まだ生きていて、いつか会えると信じます。信じていても生き返ることはない、母を忘れてしまつて恐怖感はまだあります。けれど、その気持ちが私にとつて前に進むための理由になります。後略)

きれいごとばかり書いても...その人自身になれないからほんとうのつらさを分かつてあげられない」と綴つた。答などない。でも、ともに探ろうとする教師でありたい。問と答の距離が近ければ近いほど教育の営みが遠のく気がする。「問い続ける教育」の大切さを子どもたちが示してくれた。

